

紀南地域県立高等学校の
再編活性化に向けて
(最終まとめ)

平成18年3月17日

紀南地域高等学校再編活性化推進協議会

紀南地域県立高等学校の再編活性化に向けて(最終まとめ)

平成18年3月17日
紀南地域高等学校再編活性化推進協議会

1 はじめに

- 平成16年8月、県内最南部に位置する紀南地域においても、進行する少子化など急激な社会の変化に対応するため、学識経験者、教育関係者、地域関係者及び保護者等16名の委員からなる紀南地域高等学校再編活性化推進協議会（以下、「当協議会」という）が設置され（資料1）、今後の紀南地域の県立高等学校のあり方について、県立高等学校再編活性化第二次実施計画（以下、「第二次実施計画」という）を踏まえつつ、様々な視点から2年間にわたって検討を行った。
- 当協議会は、三重大学生物資源学部石田正昭教授を会長として、平成16年度3回開催され、その協議の内容をもとに、平成17年3月28日、「紀南地域県立高等学校の再編活性化に向けて」（第一次まとめ）を取りまとめた（資料2）。さらに、平成17年度には、「第一次まとめ」を踏まえて4回にわたって検討を重ね、ここに、これまでの協議の結果を「最終まとめ」として報告する。

※参考1：協議会の開催日

平成16年度：第1回＝8月20日、第2回＝10月8日、第3回＝2月18日

紀南地域高等学校再編活性化に係る進路指導懇談会＝11月26日

平成17年度：第1回＝5月20日、第2回＝8月8日、第3回＝1月19日、第4回＝3月2日

※参考2：近畿大学工業高等専門学校について

地域から毎年数十名の進学者がある近畿大学工業高等専門学校についても、地域の教育を担う教育機関として、その状況等について、平成17年度第2回協議会において検討を行った。

2 現状と課題

- 熊野市及び南牟婁郡の中学校卒業生数は、平成13年3月には543人であったが、平成17年3月には456人となり、さらに平成19年3月には300人台へと減少することが予想されており、著しい減少傾向が見られる。（資料3）
- 当地域には、紀南高校と木本高校の2つの県立高等学校が存立し、平成7年度から平成13年度までは、紀南高校5学級、木本高校8学級、両校合わせて13学級の募集定員が策定されていたが、現在では、紀南高校3学級、木本高校7学級、合わせて10学級と減少しており、近い将来には、両校合わせて8～9学級程度となることが予想されている。
- 近年、紀南高校においては、近隣中学校等からの希望者数が減少傾向にあり、県立高等学校再編活性化基本計画が示す高等学校の最小適正規模である3学級の募集定員に対しても、ここ数年欠員が出る状況が続いている。また、木本高校においても、近年、紀北地域からの希望者が減少したり、地域の学習ニーズに必ずしも十分に答えているとは言えない状況も見られるなどの課題が指摘されている。（資料4・5・6）

- 以上のような状況を踏まえ、第二次実施計画にも示されているように、今後の紀南地域の高等学校のあり方について、近視眼的に両校の改善策を検討するのではなく、今後の地域の状況も踏まえ、中長期的な視点に立ち、地域としての基本的な考え方を示しつつ抜本的な改革案を検討する必要がある。

3 中長期的課題に対する基本的な考え方

(1) 生徒が選択できる充実した両校の教育環境づくり

ア 2校設置を基本方針とする。

イ 木本高校を1学年6学級規模以上、紀南高校を1学年3学級規模程度として併置する。

なお、木本高校で6学級、紀南高校で3学級が維持できなくなった場合、①2学級規模の分校方式の導入、又は②6～8学級規模の高校として統合することを検討する。

(2) 地域全体で一つのまとまりのある学習の場づくり

ア 木本高校普通科、同校総合学科及び紀南高校普通科単位制のそれぞれが、地域の高校教育に果たす役割を明確にする。(資料7)

イ 現在、木本総合学科及び紀南普通科単位制は重複した学習分野・内容を有するが、今後は、両校合同カリキュラム委員会を設置するなどして、双方の学習分野・内容について調整を図る。

→ 基本的な方向として、木本総合学科は、総合学科としての特徴を活かし、選択肢の多い幅の広い教育内容を持つ学科として、紀南普通科単位制は、普通科としての基礎的な教育内容と将来のキャリア形成に資する教育内容とを併せ持つ学科として整備する。

ウ 木本高校における両学科の連携を深めるとともに、個々の生徒の学習ニーズ等に応じて、紀南・木本両校間における学校間連携など柔軟な教育システムの導入を検討する。

→ 紀南セミナーハウスを活用した合同合宿活動(学習活動・部活動等)、教職員の相互乗り入れによる科目の開設と充実、進路希望等に応じた弾力的な転科制度及び学校間連携制度等の導入の検討、等

エ 紀南高校は県内最南端に在るという地域性を十分に考慮し、地域と協働しつつ、生徒の多様な学習ニーズに対応できるよう一層の充実を図る。

(3) 特色ある学校づくり

ア 木本高校：地域の伝統校として、学力の向上や体力の鍛錬に取り組み、より一層地域に信頼される高等学校として整備する。

① 普通科

将来、国公立大学等に進学して、興味・関心などのある学問を学び続けたいと考えている生徒等にとって必要な「学力」を育むための学科

- ・ 2学級程度を維持。
- ・ 習熟度別講座編成等を積極的に導入し、国公立大学及び難関私立大学に進学できるような学力の定着を図る。
- ・ 習熟度別学級編成等の導入についても検討を行う。

② 総合学科

将来、自分が何を目指すのかが決まっていな生徒が、自分の興味・関心などを探り、自分の進むべき道を見つけ、それを実現するのに必要な「学力」を育むための学科

- ・ 4学級程度を維持。

- ・ 創設後の経緯を踏まえ、講座自由選択制からコース制（7コース）へと転換させ、より専門性を高めるとともに系統的な学力の定着に努める。
- ・ 特別活動等（部活動を含む）の一層の充実を図る。

イ 紀南高校： 地域性を考慮し、多様な学習ニーズに対応するとともに、地域に開かれ、地域と一体となった高等学校として整備する。

① 普通科（単位制）

将来、希望する大学等に進学して高度な知識・技能を身につけたいとか、基礎学力を確実に修得して社会で活躍したいという生徒が、それぞれの進路希望に応じて、必要な「学力」を育むための学科

- ・ 3学級程度を維持。
- ・ 木本総合学科の教育内容との棲み分けを視野に入れ、「学習分野」の見直しを行う。
- ・ 最南端地区の生徒の学習ニーズに対応するため、単位制小規模校の特徴を生かし、個に応じたきめ細かい学習指導（大学進学～就職まで）を展開する。
- ・ インターンシップを柱に、これまで培ってきたキャリア教育の一層の充実を図る。
- ・ 地域とのコラボレーションを一層推進し、地域の伝統産業と関わりのある学習内容を取り入れたり、地域の教育力を積極的に導入し体験学習等を行う。

4 小中高の連携・協働

（1）小中高の校種間の連携

- ・ 長いスパンで地域の子どもの成長を見つめることにより、地域教育の質を高めるため、小中高の校種間の連携を強める。
- ・ 「紀南地域小中高校長会議」を設置し、相互の情報連携を図りつつ、小中高の校種間の連携・協力体制の構築を図る。
- ・ 「中高進路指導連絡協議会」を充実・発展させ、中高が連携して、紀南地域の子どもに対する進路指導及びキャリア教育のより一層の充実を図る。
- ・ 中高の授業公開を定期的実施し、熊野市・南牟婁郡それぞれの中高の教員はそれぞれの相手校の授業を参観するなど、相互の連携・交流を図る。

（2）特別活動や部活動の協働

- ・ 学校行事や生徒会活動において、小中高の校種間の連携・協働を進める。
- ・ 高校から小中学校へ、合同練習や講習会等のアプローチを行う。
- ・ 各学校と地域スポーツクラブとの連携を進め、活動の充実を図る。

5 地域との連携・住民参画の学校づくり

（1）地域への学校開放（情報発信等）

- ・ 両校において「高校だより」を作成し、全中学生及び地域に配布する。
- ・ 町広報、マスコミやケーブルテレビ等を活用して、定期的に高校情報を地域住民に幅広く発信する。
- ・ ボランティア活動や文化活動、生涯学習講座等を通して、地域の高校としてアピールする。

(2) コミュニティスクールの活用

- ・ 紀南高校にコミュニティスクールのシステムを導入するとともに、木本高校においても地域の声を教育活動に反映させるシステムの導入を視野に入れて検討を行う。

(3) 地域の協力

- ・ 固定概念で判断するのではなく、地域の子どもを地域全体で育もうとする「地域の教育力」の向上に、地域全体で取り組む。
- ・ 関係機関（警察・福祉・市町等）とのサポートネットワーク体制を構築する。

6 教職員による協働

(1) 教職員の意識改革

- ・ 地域のすべての教職員は、地域の幼小中高等学校に学ぶすべての子どもたちを導く「紀南地域の教師」として、自らの資質向上に努め、子どもや保護者の視点に立ち、校種の壁を越え、力を合わせて子ども一人ひとりの健やかな成長に全力を尽くすことを期待する。
- ・ また、各学校においては、より一層地域に信頼される学校となるよう、各学校の「改革方針」を踏まえ、学校経営品質の取組を進めつつ、継続的な改善活動を推進する必要がある。
- ・ すべての中学校教職員は、この「最終まとめ」に示した「中長期的な課題に対する基本的な考え方」を踏まえ、両校に対するこれまでの固定的な見方を払拭し、「紀南地域の教師」として、両校が併置された中で地域の高校教育が成り立っているという現在の教育環境の維持・推進に努める。
- ・ すべての高等学校教職員は、「紀南地域の教師」として、所属する高等学校のことに限らず、常に両校で地域の高校教育を担うという意識を持って教育に携わる必要がある。

(2) 教職員の人事交流

- ・ これまで進められてきた紀南地域内での人事交流に止まらず、広く地域外の教職員との積極的な人事交流に努め、常に新しい視点を持って教育活動が行えるように努める。
- ・ 小中間の人事交流はもとより、他地域で実践されている連携型中高一貫教育の成果も参考に、中高間での教員交流について検討を行う。
- ・ 両高等学校間において、教員が相互に乗り入れ授業を行ったり、部活動における指導の協力体制を整備するなど、両校の積極的な教員交流に努める。

7 おわりに

今後は、この「最終まとめ」をもとに、県立高等学校再編活性化基本計画の理念を踏まえつつ、紀南地域における県立高等学校の再編活性化が推進され、生徒や地域の人々にとって、より一層魅力ある充実した教育環境が整備されることを期待する。

木本高校 再編活性化方針

県立木本高等学校

木本高校再編活性化方針

三重県立木本高等学校

改革の目的

- ① 地域の伝統校としてより一層、地域から信頼される学校づくり
- ② 紀南・木本両校で、紀南地域の子どもたちの学習ニーズに対応できる学校づくり

1 普通科

〈経緯〉

- ・ 平成6年の総合学科導入まで、6～7学級募集され、大学進学等のニーズに対応する。
- ・ 総合学科導入時に募集停止も検討されたが、国公立大学進学等のニーズに応えるため、平成15年度まで3学級募集される。
- ・ 希望する生徒減少及び第2希望での入学等の課題等の理由から、平成16年度以降は、2学級の募集。
- ・ 国公立大学合格者数は、平成9年度の36人をピークに、毎年9人～24人程度。

〈設置目的〉

- ・ 自由度の低い固定的な教育課程を持ち、地域における国公立大学及び難関私立大学への進学希望に対応できる学科とする。

〈改革概要〉

- (1) 2学級募集を維持し、相互に競い合う学級経営
 - ① 少数精鋭によるレベルの高い学習
 - ② 徹底した習熟度別講座編成及び習熟度別学級編成導入の研究
 - ③ 地域の特進的役割・センター試験受験者数100名目標（現状 H16：62人）
- (2) 三重大学との連携強化
 - ① 地元三重県や熊野市・南牟婁郡をリードする人材の育成
 - ② 高大連携授業受講生数の拡大及び三重大学との連携強化
 - ③ 三重大学合格者20名を目標（現状 H14：7人、H15：5人、H16：4人）
- (3) 普通科レベルアップ策
 - ① 学ぶ目的・学ぶ意義を考えさせ、主体的・意欲的に大学進学に取り組む「学ぶ力」の育成
 - ② 進学に特化した教育課程・進路指導のあり方の研究（県外ベンチマーキング等）
 - ③ 1・2学年時に英国数の徹底した習熟度別講座編成
 - ④ 長期休業中等での課外・補習授業の内容の工夫（学習塾の授業内容の研究、等）
 - ⑤ 土曜日補習授業の本格的実施
 - ⑥ 図書館の充実と利用の拡大
 - ⑦ 小論文指導の充実

2 総合学科

〈経緯〉

- ・ 平成6年度、全国に先駆けて導入。数多くの選択科目を開設したり、「産業社会と人間」等

による進路ガイダンスの工夫等がなされ、熱気ある取組が行われる。

- ・ 導入3～4年後あたりから、7系列（国際教養系、環境科学系、情報系、ビジネス系、生活科学系、芸術・文化系、体育・武道系）ごとの学習指導がやや弱く、生徒の安易な科目選択が課題となる。（但し、「全く定期考査を受けない生徒」は誤解）
- ・ キャリア教育の充実を図るとともに、自らの進路を切りひらくため、系統的な学力を身につけさせることが課題。

〈設置目的〉

- ・ 地域の数多くの生徒の進路選択を導き、充実したキャリア教育を実施することにより、多様な進路希望を実現できる中心となる学科とする。

〈改革概要〉

(1) 4学級以上募集を維持し、コース制的新総合学科の創造

- ① 7コース（看護・情報・商業・家庭・体育・芸術・進学）を設置し、より専門的かつ系統的な学力の育成を目指した主体的な学習の推進。
- ② 紀南における「分野」と調整を図りつつ、コースの学習内容を検討。（両校合同カリキュラム委員会の開催）
- ③ コース制的経営を行う新しい総合学科の在り方の工夫（県外ベンチマーキング等）
- ④ 地域の教育力の活用

(2) 進路ガイダンスの充実

- ① 生徒・保護者進路希望アンケート調査の充実
- ② 生活実態調査の実施と保護者カウンセリングの実施
- ③ コース別学力定着度の測定

(3) キャリア教育の充実

- ① 「産業社会と人間」及び「総合的な学習の時間」の総合的活用（相互にリンクさせたシラバスの作成）
- ② 地域の教育力の積極的活用
- ③ 紀南のインターンシップに学びつつ、中学校と連携した勤労観・職業観の育成

3 その他

〈改革概要〉

(1) 地域の中心校として、学科・学校の枠を越えた総合的かつ柔軟な学校経営

- ① 生徒の進路希望や学習状況を総合的に勘案し、普通科・総合学科間の枠を越えた学習機会の設定（柔軟な講座編成）
- ② 学科間の転科や紀南高校との学校間連携等を視野に入れた柔軟なシステムの導入の検討
- ③ 紀南高校との合同学習合宿や地域中学校等との連携

(2) 部活動の充実

- ① 部活動加入率のアップ（現状：71%）
- ② 「文武両道」の精神の徹底及び重点部活動（女子ソフトテニス、男子バスケットボール、ラグビー、吹奏楽、等）の全国レベルへの底上げ
- ③ 紀南高校や中学校との合同練習

(3) 地域の学校として地域から信頼される学校づくり

- ① 学校経営品質の積極的活用
- ② コミュニティスクール的なシステムの導入の検討
- ③ 情報発信（「木高通信」、マスコミ等の活用等）

紀南高校 再編活性化方針

県立紀南高等学校

紀南高校再編活性化方針

三重県立紀南高等学校

1 安心・安全な学校づくり

そのために、2年間取り組んで来ました。

(重点目標)

平成16年度：「挨拶をしよう」「生徒とともに地域に出よう」「校内を潤いある空間に」

平成17年度：「コミュニケーションを大切に」「学校生活環境を美しく」「進路保障に取り組もう」

また、平成16年9月より、一貫して「授業を大切に」する取組を進めてきました。

その目的は、…

(1) 人間教育の視点を重視

- ① 他人に迷惑をかけない心を育てよう
- ② 生徒を地域とともに育てよう
- ③ 地域に少しでも貢献しよう
- ④ 自分に何が出来るか工夫しよう

具体的には、…

- ・ 服装・頭髪を指導する → 再登校指導 → 地域の評価を下げない
- ・ 「インターンシップ」「町内・七里御浜清掃作業」「学校周辺除草作業」 → 作業を厭わない → 仕事の大切さを知る
- ・ 生徒会活動の活発 → 災害募金、学校行事早朝清掃 → 人の為に！
- ・ モニュメント制作、花いっぱい運動 → 潤いある学校に！
- ・ ボランティア活動 → 心ある人間に！
- ・ 地域に貢献 → 吹奏楽部の慰問コンサート → 地域に元気を
- ・ 商業の授業でパソコンポスター制作 → 紀南高校を知ってもらう

(2) 基礎学力の重点化

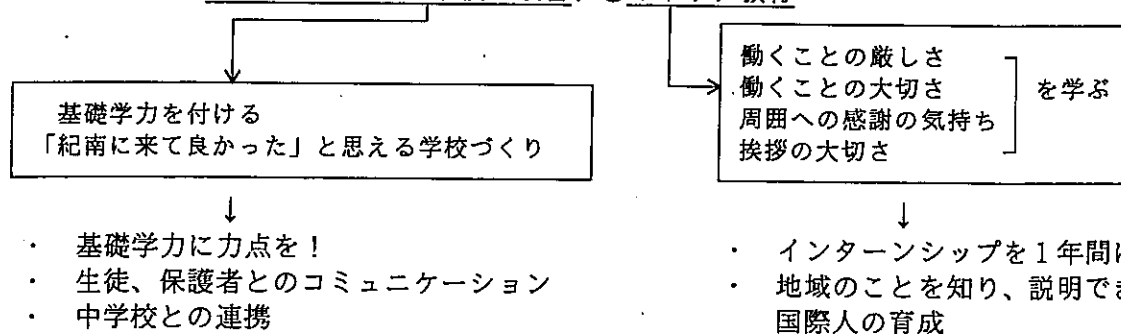
- ① 社会に出て困らない学力を付けよう
- ② 卒業して役立つ資格の取得を

具体的には、…

- ・ 授業を大切に取る取組 → 授業参観を通して → 安心して学べる、学力を付ける
- ・ 資格取得に目的を持たせよう → 英語検定、数学検定、TOEIC、情報処理検定等
- ・ 基礎的な読み書きの力を付ける → 漢字検定、読書指導、選択科目を減らし必修科目を増加

2 分野の見直し

学校改革の2大柱： ①「気づき」による学校の改善、②キャリア教育



(1) 現状の5分野 → 教養、福祉、芸術、情報、スポーツ

(2) 改革案=新5分野 → 『進学、福祉、芸術、情報、地域』

コミュニティスクール推進事業の指定を受けて、地域に貢献し地域に支えられる学校をめざしている。そのため、上記5つの分野のうち、2つの分野について改革を行う。

① 改革の内容

- ・ 福祉、芸術、情報の3分野は現状どおり
- ・ 教養分野を進学分野に改編
今までの再編活性化推進協議会で意見があったが、生徒の進学希望に応じ、充実した授業を展開し、進学にも対応できる内容をさらに充実させる。
- ・ スポーツ分野を地域分野に改編
地域をキーワードにし、地域とともに学び、地域のことも学ぶ。

② 「地域分野」の設置目的

地域に支えられる学校をめざし、学校が地域にできることや、地域が学校にできることを、お互いに考え、学校と地域が一体となって生徒を育てることを目的とする。

また、地域を知ることは国際社会のなかで自分の地域を語れることにもつながり、キャリア教育を進める上で、地域産業を学び理解することや生徒と地域の人たちが交流し共に活動することが重要である。そのような中で、生き方や考え方を意識し、社会人として必要な教養を深める必要が求められている。

(3) その中で取り組めそうな授業（例）

① 地域の人が講師として参加

「野外活動」（既設）……………農業や漁業、カヌー、ゴルフ等の体験学習

「地域の食文化」（既設）……………地元の食材を使って昔からの調理方法を学ぶ

「手話コミュニケーション」（既設）……………福祉活動の1つ

「地域の産業」……………地域の特徴的な産業を学び体験する

② 地元史を学ぶ

「地域の歴史」……………地元の歴史や産業について学ぶ

「熊野古道」……………世界遺産に登録となった古道についての歴史や動植物について学ぶ

「総合的な学習」も活用できるか

③ 公開講座を開講

「芸術」に関する科目……………例えば絵画教室、書道教室等

「文書デザイン」……………写真を加工してポスターの作成等

「英会話」……………ALTと共に英会話の勉強をして、世界遺産を世界の人に伝えることの出来る英会話能力を身につける。

※ 「園芸療法」については、福祉分野の中で園芸を学びながら療法としての実践を積む。

「みかん栽培」など地域産業と係わりのある学習内容の導入について検討を行う。

3 紀南セミナーハウスの活用(寮施設の改修)

部活動の活性化については、今までの再編活性化推進協議会の中で何度も意見が出されていることから更なる活性化をめざし、既存の施設の有効利用を図り、部活動のみならず教育活動全般に活用する。

(1) 活性化の方法

平成12年度に閉鎖となって使用していない学校の「有朋寮」を有効活用するため、申請中の計画が実施に移されることとなった。この施設を改修し、主に下記の用途に活用する。

① 長期休業中の勉強合宿、各教科活動、ホームルームにおける特別活動等

② 部活動の合宿や強化練習、及び他校招請による練習試合

③ 地域に開放し、公開講座等に活用

(2) 内容

- ・ 食堂を多目的ホールに改修し、生徒のクラス別特別活動や公開講座などに多目的利用
- ・ 1・2階の2人部屋で宿泊できる個室にし合宿に利用
- ・ 和室2つ（20畳）では男女別に勉強合宿できる総合宿泊室に利用
- ・ 浴室とその更衣室を利用出来るように改修

4 コミュニティスクール推進事業について

コミュニティスクール制度とは、保護者や地域住民等が一定の権限と責任を持って学校運営に参画するシステムであり、現在、当該制度の円滑な導入を図るため、コミュニティスクール推進事業の委嘱を受け、実践研究を行っている。

当該制度を導入することにより、より一層、地域に開かれた信頼される学校づくりを推進し、地域に愛され地域の方々に支えられた高等学校となることを目指している。

地域の積極的なサポートにより、紀南高校の特色である「キャリア教育」をより一層充実させ、インターンシップを柱に3年間のスパンでの「紀南高校版キャリア教育」を創造する。

→ 紀南高校 = 地域に開かれた信頼される学校 + 地域に支えられた学校

参考資料

紀南地域高等学校再編活性化推進協議会設置要綱

(設 置)

第1条 少子化などの社会の変化が著しい中、紀南地域における高等学校の特色化、魅力化を図り、学習者にとって魅力ある学習環境を整備するため、紀南地域高等学校再編活性化推進協議会（以下、協議会という。）を設置する。

(所掌事項)

第2条 協議会は、県立高等学校再編活性化第二次実施計画に従い、次に掲げる事項について具体的に検討し、その結果を三重県教育委員会教育長に報告する。

- (1) 今後の地域社会における県立高等学校の在り方に関すること
- (2) 施設・設備に関すること
- (3) 県立高等学校再編活性化推進に資すること
- (4) その他検討を要すること

(組 織)

第3条 協議会は、学識経験者等、関係県立高等学校長、関係市町村教育委員会教育長、小中学校PTA関係者、高等学校PTA関係者、県教育委員会事務局関係者等で組織する。

- 2 協議会に、会長、副会長を置く。
- 3 会長及び副会長は、委員の中から互選により決める。
- 4 会長は会務を総理し、副会長は会長を補佐し会長に事故ある時は職務を代行する。
- 5 協議会は、必要に応じて関係者の出席を求め、意見を聞くことができる。

(調査委員会)

第4条 協議会のもとに、必要に応じて調査委員会を設置する。

- 2 調査委員会は、テーマに応じて会長の指名する関係者で構成する。

(会議)

第5条 協議会は、会長が招集し、会長が議事運営する。

- 2 木本高等学校を幹事校とし、協議会の開催、資料の作成等を幹事校において処理する。

(その他)

第6条 この要綱に定めるもののほか、協議会の運営に関する事項は会長が定める。

附 則

この要綱は平成16年7月26日から施行する。

平成16・17年度 紀南地域高等学校再編活性化推進協議会委員

学識経験者（三重大学教授 元紀南活性化検討委員会委員長）	石田 正昭
地域有識者（紀南おやこ劇場代表）	小山 芳子
地域有識者（元御浜町文化協会長）	下 かすみ
木本高等学校長	(平成17年度) 大谷 正典 (平成16年度) 川本 健
紀南高等学校長	宇田 克巳
熊野市教育委員会教育長	鈴木 昶三
南牟婁郡町村教育委員会教育長代表（御浜町教育長）	檜作 功
紀南地区PTA連合会代表	辻本 満哉
木本高等学校PTA代表	中濱 圭史
紀南高等学校PTA代表	田尾 友児
木本高等学校同窓会代表	谷川醇太郎
紀南高等学校同窓会代表	廣畑 勝也
紀南地区小中学校長会代表（木本中学校長）	(平成17年度) 中村 盛男
（御浜中学校長）	(平成16年度) 岩田 洋
紀南地区小中学校教員代表（飛鳥中学校教諭）	檉山 祐一
紀南地区高等学校教員代表（木本高校教諭）	向井 理
熊野教育事務所長	榎本 和能

協議会事務局：木本高校

「紀南地域県立高等学校の再編活性化に向けて」第一次まとめ（骨子）

平成17年3月28日

紀南地域高等学校再編活性化推進協議会

1 全般

- 批評家でなく、企画者であり行動者に
中学校卒業生数の減少など、地域の状況分析は誰でもできる。本協議会の使命は、課題解決のための具体的な行動計画や方向性を提示することである。
- 協議会の位置
協議会は、地域が子どもたちをどのようにサポートし、大人がどのように責任を担うのか議論し、地域へ提言していくことが大事である。
- 学校の規模
高等学校の適正規模を1学年3学級から8学級までとし、これを十分踏まえた上で、それぞれの高校が、特色ある学校づくりを進めていくことが大事である。
- 地域がつくる学校教育
学校は、地域と情報を共有するとともに、地域へのアピールの仕方を考える必要がある。

2 小中高の連携・協働

- 小中高の接続
小・中学校と高校とが互いの連携を強化する必要がある。また、一人ひとりの児童・生徒の学習内容の到達度について、小・中学校や高校が把握することが大事である。
小・中学校が、高校卒業後の進路状況など、高校の情報をしっかり把握した上、児童・生徒や保護者に伝える必要がある。また、中学校卒業後の追跡調査も必要である。
- 高校の努力
高校から中学校へのコミュニケーションがなされるような仕組みづくりを早急に行うことが必要である。
高校は小・中学校に、積極的に情報を提供・発信し、生徒の進路指導に役立てるように努めなければならない。

3 地域との連携、地域住民の参画による特色ある学校づくりの推進

- 高校の価値
木本、紀南両校は、それぞれの学校教育活動が子どもたちの願望にどう応えているのか、子どもたちがどの程度満足しているのか、検証する必要がある。
- 公開
高校の教育活動やその成果を、積極的に地域へも情報発信していく必要がある。
- 参画
両校が設置された経緯を考え、地域の子どもたちに高校教育を受けさせる環境づくりに、地域が積極的に関わっていく必要がある。
また、地域住民が一定の権限と責任を持って高校の運営に参画する仕組みについて研究することとし、その際、住民の意向を適切に反映させるための仕組みや、学校の

評価の在り方についても研究を進める。

○ 特色ある学校づくり

紀南高校の卒業者の3割は地元を支える人材となっている。このことを地域ももっと認識しなければいけない。

両校は、生徒の進路希望の実現についての検証を行い、今後の教育活動に生かしていく必要がある。また、小中学校からの継続性を重視しつつ、学校外の諸機関、関係者と連携して、生徒の発達段階や学校の特色づくりに応じた「キャリア教育」を一層推進する必要がある。

4 学校活性化のための具体的な取組

○ 学校評価

木本、紀南両校とも授業評価の取組を、これまで以上に進める必要がある。

○ 学校の自立

中学校卒業生数が激減していく中で、慣例にとらわれず、両校がそれぞれの特色化を進め、地域の生徒に選択される学校となるような取組を進めることが必要である。

○ 学校間の連携

両校が、例えば授業における教員の相互交流などを行っていくことも必要である。また、両校の生徒が、学校行事や部活動で相互に交流できるような体制を整えていく必要がある。

さらに、生徒が、双方の授業を受けることができるよう、学校間連携の仕組みづくりについても研究することが望まれる。

なお、他地域の高校との生徒交流についても、検討していく必要がある。

○ 教職員の意識改革

教職員は、地域の教育ビジョンをしっかりと持つことが必要である。また、他地域の教育情報を積極的に収集するなどして、自らのよさを伸ばすとともに、継続的な改善活動を行わなければならない。

○ 教職員の人事交流

紀南地域外との人事交流を積極的に進めるべきである。

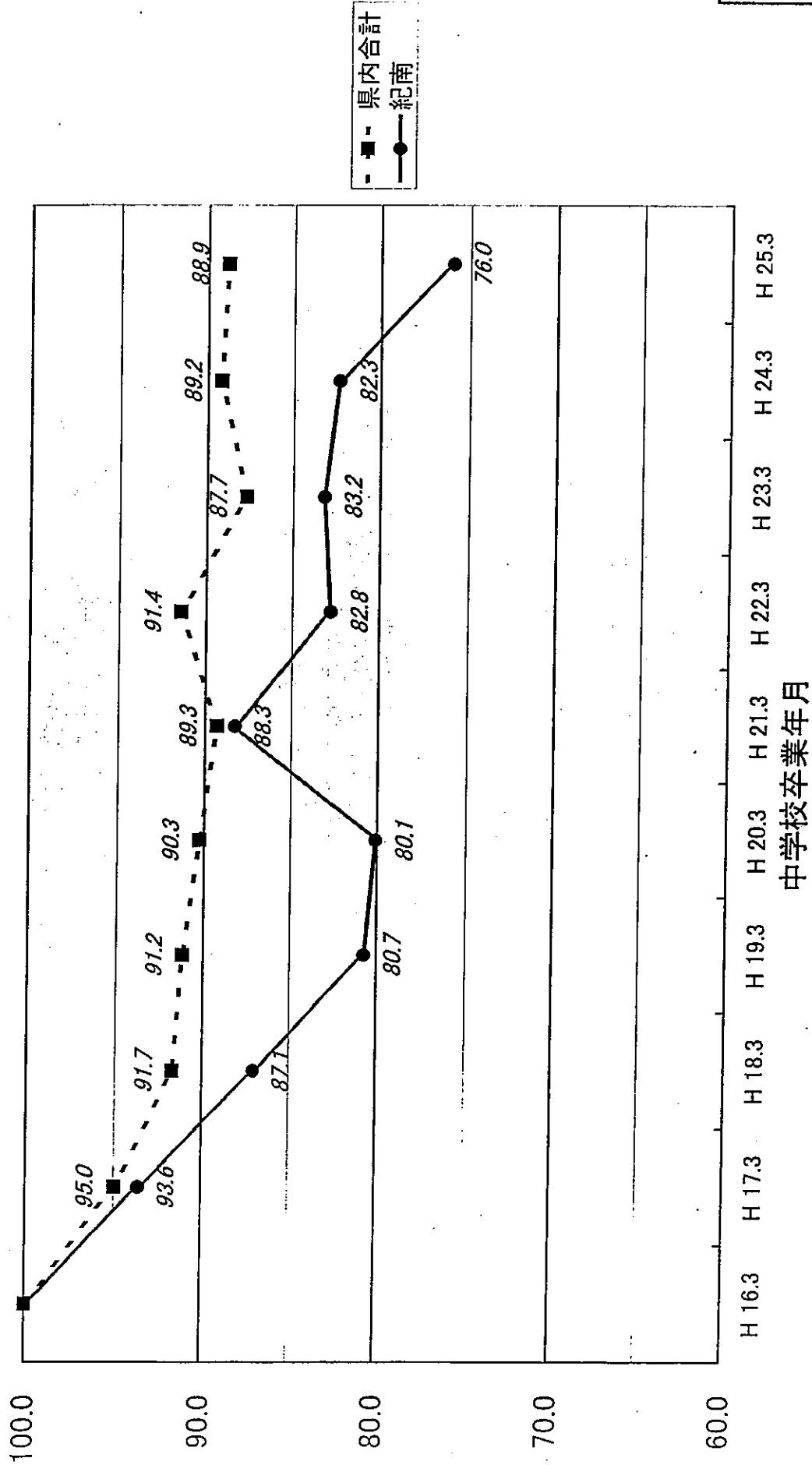
○ 画一から切磋琢磨へ

両校が重なるような学科・コースではなく、資格取得も含めながら、それぞれが特色ある学校づくりを進めていくことが必要である。

5 中長期的な検討課題

紀南地域の中学校卒業生数は、平成19年度以降は400人前後で推移することが予想される中、紀南地域の県立高校の定数減が避けられない状況であることを踏まえ、地域社会における新しい高校の姿について、今後検討する。

平成16年を100としたときの今後の中学校卒業予定者の割合 (平成16年度第1回資料)



平成17年度 東紀州地域 中学校卒業生及び学級数の推移予測（含社会増）

平成17年5月1日 教育改革室調べ

	H 13.3 卒業	H 14.3 卒業	H 15.3 卒業	H 16.3 卒業	H 17.3 卒業	H 18.3 現中3	H 19.3 現中2	H 20.3 現中1	H 21.3 現小6	H 22.3 現小5	H 23.3 現小4	H 24.3 現小3	H 25.3 現小2	H 26.3 現小1
尾鷲市	卒業者数	271	258	251	226	227	206	190	194	202	186	197	176	157
	前年度対比	11	-13	-7	-25	1	-11	-16	4	8	-16	11	-21	-19
	H17.3対比						-10	-37	-33	-25	-41	-30	-51	-70
北牟婁郡	卒業者数	221	238	230	215	184	173	160	173	174	176	173	166	159
	前年度対比	-29	17	-8	-15	-31	-11	-13	13	1	2	-3	-7	-7
	H17.3対比						-11	-24	-11	-10	-8	-11	-18	-25
小計	卒業者数	492	496	481	441	411	379	350	367	376	362	370	342	316
	前年度対比	-18	4	-15	-40	-30	-10	-29	17	9	-14	8	-28	-26
	H17.3対比						-10	-61	-44	-35	-49	-41	-69	-95
熊野市	卒業者数	257	237	214	199	211	172	162	173	151	161	182	155	163
	前年度対比	-13	-20	-23	-15	12	-28	-11	-10	-22	10	21	-27	8
	H17.3対比						-28	-49	-38	-60	-50	-29	-56	-48
南牟婁郡	卒業者数	286	261	254	288	245	218	224	249	244	237	203	210	232
	前年度対比	-6	-25	-7	34	-43	-1	-26	6	25	-7	-34	7	22
	H17.3対比						-1	-27	4	-1	-8	-42	-35	-13
小計	卒業者数	543	498	468	487	456	427	386	422	395	398	385	365	395
	前年度対比	-19	-45	-30	19	-31	-29	-37	-4	36	-27	-13	-20	30
	H17.3対比						-29	-70	-34	-61	-58	-71	-91	-61
想定クラス数					10	10	8.4	8.3	9.2	8.5	8.6	8.2	7.7	8.5

	H 13.3 卒業	H 14.3 卒業	H 15.3 卒業	H 16.3 卒業	H 17.3 卒業	H 18.3 現中3	H 19.3 現中2	H 20.3 現中1	H 21.3 現小6	H 22.3 現小5	H 23.3 現小4	H 24.3 現小3	H 25.3 現小2	H 26.3 現小1
北部合計	卒業者数	6,554	6,434	6,343	6,260	6,052	5,832	5,949	6,000	6,026	5,935	5,927	6,098	6,142
	前年度対比	-182	-120	-91	-83	-208	-220	121	-4	51	-91	-8	171	44
	H17.3対比						-220	-99	-103	-52	-117	-125	46	90
中部合計	卒業者数	8,514	8,503	8,190	8,064	7,632	7,446	7,190	7,082	7,391	7,051	7,262	7,102	7,225
	前年度対比	-414	-11	-313	-126	-432	-186	-98	-158	-108	-340	211	-160	123
	H17.3対比						-186	-284	-442	-550	-581	-370	-530	-407
南部合計	卒業者数	6,397	6,180	5,935	6,000	5,618	5,384	5,224	5,092	5,155	4,910	4,992	4,878	4,830
	前年度対比	-247	-217	-245	65	-382	-234	-169	9	-132	63	82	-114	-48
	H17.3対比						-234	-403	-394	-463	-708	-626	-740	-788
県内合計	卒業者数	21,465	21,117	20,468	20,324	19,302	18,662	18,516	18,174	18,572	17,896	18,181	18,078	18,197
	前年度対比	-843	-348	-649	-144	-1,022	-640	-146	-153	-189	-676	285	-103	119
	H17.3対比						-640	-786	-839	-1,128	-1,406	-1,121	-1,224	-1,105

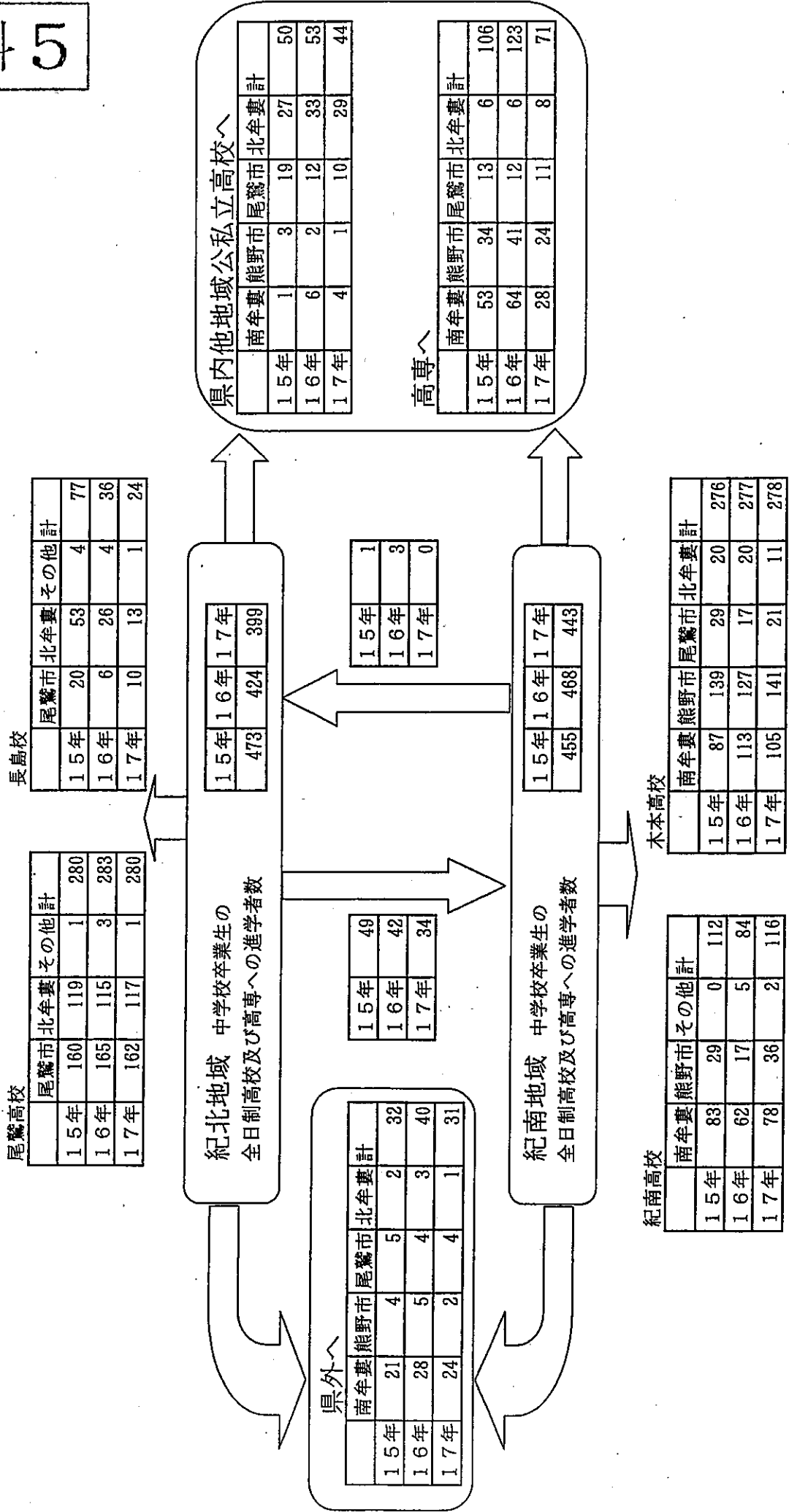
過去4カ年の紀南地域中学校卒業者の進路状況

平成17年5月1日調査

中学校卒業者	進学者											全日制課程進学者 (B/A)	総進学者率 (C/A)		
	全日制課程進学者						進学者合計 (C)			通信制課程進学者	専修各種職訓等			就職その他	
	県内		県外		計 (B)	定時制課程進学者	高専進学者	盲聾養高等部進学者							
	県立	私立	県内	公立											
13	熊野市	237	173	3	8	184	7	41	1	233	2	1	1	77.64%	98.31%
	南牟婁郡	261	165	1	28	194	5	60	1	260	0	0	1	74.33%	99.62%
	紀南地域	498	338	4	36	378	12	101	2	493	2	1	2	75.90%	99.00%
14	三重県	21,117	15,088	3,759	361	19,208	395	431	80	20,114	324	55	624	90.96%	95.25%
	熊野市	214	170	1	4	175	0	34	2	211	1	0	2	81.78%	98.60%
	南牟婁郡	254	170	2	21	193	5	53	2	253	0	0	1	75.98%	99.61%
15	紀南地域	468	340	3	25	368	5	87	4	464	1	0	3	78.63%	99.15%
	三重県	20,466	14,570	3,829	348	18,747	336	463	88	19,634	260	56	516	91.60%	95.93%
	熊野市	199	149	0	5	154	2	41	1	198	0	0	1	77.39%	99.50%
16	南牟婁郡	288	181	0	28	209	10	64	2	285	0	0	3	72.57%	98.96%
	紀南地域	487	330	0	33	363	12	105	3	483	0	0	4	74.57%	99.18%
	三重県	20,324	14,375	3,792	343	18,510	411	476	98	19,495	322	37	470	91.07%	95.92%
16	熊野市	211	178	0	2	180	3	24	1	208	1	0	2	85.31%	98.58%
	南牟婁郡	245	185	2	24	211	2	28	0	241	1	1	2	86.12%	98.37%
	紀南地域	456	363	2	26	391	5	52	1	449	2	1	4	85.75%	98.46%
16	三重県	19,302	13,754	3,517	342	17,613	438	388	105	18,545	273	35	449	91.25%	96.08%
			71.3%	18.2%	1.8%	91.2%	2.3%	2.0%	0.5%	96.1%	1.4%	0.2%	2.3%		

資料 5

東紀州地域全日制高校及び高専への進学状況の推移



中学校卒業予定生徒の進路希望状況調査の推移

平成17年度中学校卒業予定者進路希望状況調査

			18年度入 学者定員	進 学 者 数	尾鷲市 小計	北牟婁郡 小計	熊野市 小計	南牟婁郡 小計
12月	木本	普通	80	83	6	3	39	35
		総合学科	200	229	6	27	91	105
		計	280	312	12	30	130	140
	紀南	普通	120	78	0	0	18	60
	近畿大学工業高等専門学校	135	76	6	8	21	17	
卒業者数				18729	217	183	183	245
10月	木本	普通	80	96	12	3	39	42
		総合学科	200	236	7	27	96	106
		計	280	332	19	30	135	148
	紀南	普通	120	69	0	0	15	54
	近畿大学工業高等専門学校	135	65	7	8	20	15	
卒業者数				18752	217	183	183	245
7月	木本	普通	80	91	9	3	39	38
		総合学科	200	264	9	26	112	117
		計	280	355	18	29	151	155
	紀南	普通	120	55	0	0	5	50
	近畿大学工業高等専門学校	135	42	3	5	16	12	
卒業者数				18727	217	183	183	226

平成16年度中学校卒業生進路状況調査

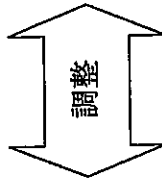
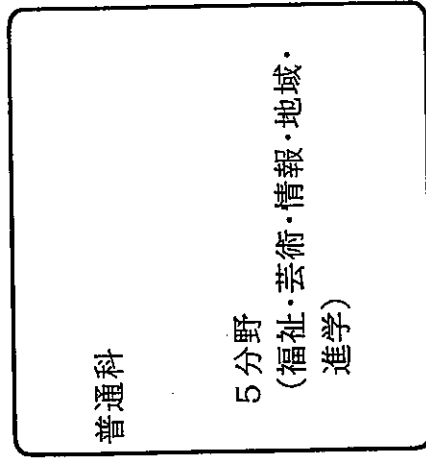
			18年度入 学者定員	進 学 者 数	尾鷲市 小計	北牟婁郡 小計	熊野市 小計	南牟婁郡 小計
木本	普通	80	79	8	1	46	24	
	総合学科	200	199	13	10	95	81	
	計	280	278	21	11	141	105	
紀南	普通	120	116	2	0	36	78	
卒業者数				19386	227	184	211	245

平成16年度中学校卒業生進路希望状況調査

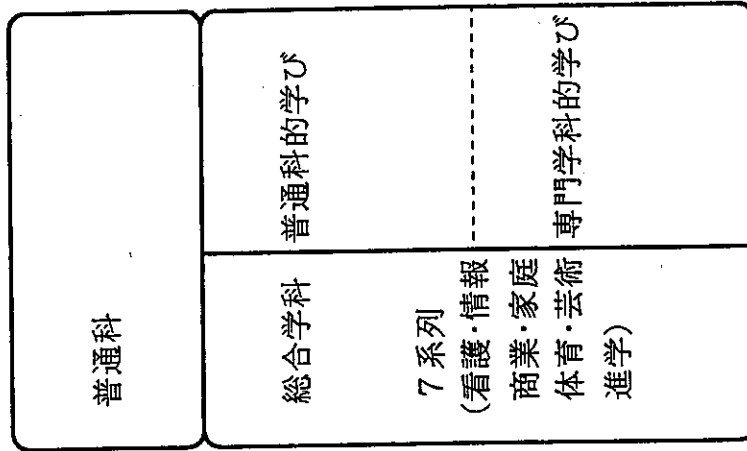
			18年度入 学者定員	進 学 者 数	尾鷲市 小計	北牟婁郡 小計	熊野市 小計	南牟婁郡 小計
12月	木本	普通	80	82	8	1	46	27
		総合学科	200	238	14	9	119	96
		計	280	320	22	10	165	123
	紀南	普通	120	78	0	0	15	63
	近畿大学工業高等専門学校	135	68	5	6	20	27	
卒業者数				19388	226	184	211	245
10月	木本	普通	80	84	8	2	44	30
		総合学科	200	263	21	6	126	110
		計	280	347	29	8	170	140
	紀南	普通	120	70	0	0	13	57
	近畿大学工業高等専門学校	135	48	4	5	16	17	
卒業者数				19393	226	184	211	246
7月	木本	普通	80	99	10	5	48	36
		総合学科	200	251	19	3	120	109
		計	280	350	29	8	168	145
	紀南	普通	120	54	0	0	9	45
	近畿大学工業高等専門学校	135	55	5	5	22	21	
卒業者数				19368	225	184	209	247

資料 7

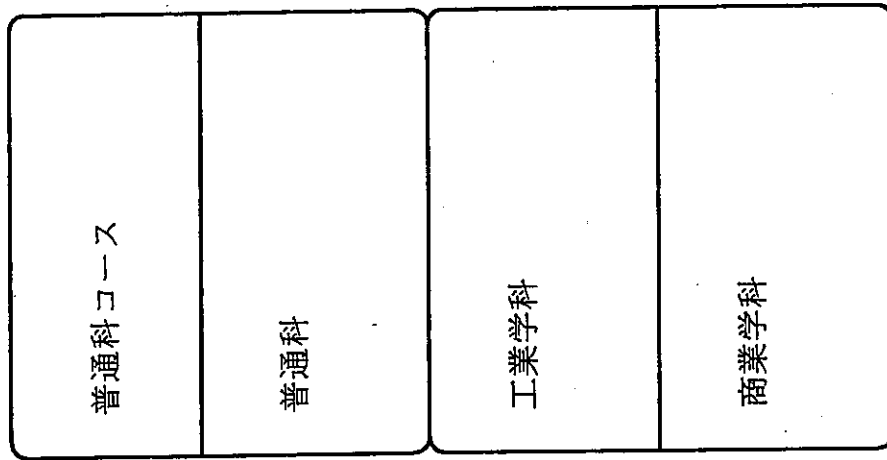
紀南高校



木本高校



普通科と専門学科の併設校



普通科

専門学科